

ラッコ万歳！

川口 幸宏



モントレール — 勝手知ったこの小さな漁港の街は文学の舞台にもなり、また、シーオッター（和名じつはアイヌ語ラッコ）が生息しているところ（南限）としても有名なところですが。しかしそのわりには、観光客が少なく、落ち着いています。明日は帰国の日という一日のこと。ゆったりとフィッシャ

ーマンズ・ワーフ周辺で体を休めることにいたしました。ヨットハーバーに果たしてラッコがいますか！？

私は家族と離れて、町に出て買い物をして遅れて浜辺に出掛けたのですが、通り掛かったヨットハーバーを見ると、二頭のラッコがすぐ目の前でロマンスの真っ最中。慌てて家族に声を掛け、四人でラッコ・ロマンスの見学と相成りました。

雄のラッコが、あの短い手でしっかりと雌を抱きかかえ、海の表面をくるくると体を入れ替えて行きます。水族館でも見ることのできないシーンに、私（たち）は大感激。悪いかな、と思いつつ、夢中でカメラのシャッターを切りました。

さて、ロマンスが続いたのは30分ほどでしょうか。その後どうするのか、大変興味深かったのです。ちらっと見えた赤いペニスを、娘が、足に付けられた鑑識表と見誤ったのは大爆笑。「あのね、あれは鑑識じゃないの。」そう言うと、娘は、「鑑識に見間違えたなんて、落ち込んだ。落ち込んだ。」といいながらも、観察の目を休めませんでした。

二頭は、波に身を任せて、ゆったりと漂います。頭を並べたり、互いに逆さの位置になったり。波は岸边に打たれますから、おのずからラッコは、私たちのほうに近づいてきます。それまで見えなかったお臍が見えたり、指一本一本が見えたり。白い顔に小さな目がとても愛らしい表情を作っています。

もう少ししっかり見えるかな、というほどの距離になると、雄のラッコが雌のラッコの脇腹に頭を寄せ、岸とは反対の方向に向かって泳いでいきます。すーと私たちから去っていくT字がたの二頭のラッコに、ロマンスのときよりも強い愛情を交わしあっていること

を感じました。

その繰り返しを1時間ほども眺めていたでしょうか。やがてラッコたちは、思い思いに海中にもぐり、えさを取っていました。しかし、二頭の距離はほとんど離れませんでした。

*

モントレー湾の所々に、さざれ石風体の岩が海中より突きだしております。ここはアザラシやオットセイが、日中、身体を横たえている光景があり、一時観光客は足を止めて眺め入るわけであります。



わたしは、そのさざれ石風体の岩の一群の、もっとも岸壁に近く、もっとも海洋生物の休息場に近いところに何

とか行き着き、どっかと腰を下ろして、彼らを観察、と相成りました。

どのような縄張りがあるのかは存じませんが、ほとんどの岩に計10数体の巨大ナメクジ風の動物がひしめき合って横たわっておられます。やはり貫禄充分の彼ないし彼女が一番条件がいいとおぼしきところ、すなわち水に軀を浸さなくてよい場所に、一番軀の小さい彼ないし彼女は小さき波にチャプチャプと洗われ、ゆらゆらと揺らめいておりました。

時折、顔を上げ、こちらを見つめなさいます。しっかりと視線があったときなど、思わず、ヨスッ、とご挨拶申し上げるのでありますが、もちろん偶然の所作、時折、彼ないし彼女が片手をあげる仕草をなさるのであります。

海の犬だとか海の豹だとかの名前が付いているわけがはっきりと分かりました。目がまさに犬や豹なのです。かわいく、きらきらと輝いておりました。

両の足をこすりあげる仕草はいったい何を表現しようとしているのでありましょうか。我ら人間には、ヤー、ようこそ！てな感じに写ります。思わずわたしも、ヤー、おじゃましていますよ、と声を出してご挨拶。すると、プイ、とばかりに顔を元の位置、つまりあらぬ方に視線を移すあるいはじっと目を閉じしばしまどろみに入られます。

一時間余も眺めていた頃でしょうか、わたしのごく目の前を、潜水服を着込んだような黒い物体が移動してきました。オットセイです。自然に手が出てしまい、その頭をなでました。いやがる風でもなく、驚く風もなく、そのまま右から左へと泳いでいきました...

ホントはこんな事はしてはいけません。人間と自然の生物との共存は、相互不干渉であつてこそなのです。かわいい、とかすてき、とかいう感情とその表現は、あくまでも人間中心であつて、自然生物にとっては、触れず語らずが一番大切にされていることを感じる生活なのです。反省。.... でも、生まれてはじめてだよなあ、オットセイに触れたのは。

かのオットセイ君、一番大きな近くの岩に昇り始めました。ビョンビョンというほど軽やかな擬音ではないけれど、ドタッドタツというには失礼な擬音となる、全身をバネにしてはい上がっていく彼に、幸せあれ。.... と、彼女かもしれませんが。

ところで、岩に昇る様については形容いたしました、岩に横たえている身を、例えば90度ほど回転移動なさるのは、いったいどのようにしてだと、推測なされますか。

そう、やはり全身を小さなバネにして、ビョンビョンと回転なさるのですね。

*

オットセイ、アザラシなどの休息の群に別れを告げ、陸のベンチに腰をかけ、何気なく目先の茂みの入り口を見ると、まん丸い直径10センチほどの穴が開いているではありませんか。なんだろう？まさかね、と思いながら、おむすびコロリンコロリン、と小さな声で唱いながら、パンのかけらをその穴に幾切れか投げ込みました。

程なく、茶色の動物体が穴から現れました。耳はほとんどからだにめり込むようで小さく、頬を膨らまし、まん丸ちいこ目玉をほんのちょっぴり飛び出させた生物、そう、ネズミ君の登場であります。しっぽも短めのこのネズミ君、どちらかというともルモットの風情がありましたが、鳩、カモメ、ちいさカラス、雀などの群にパンくずを奪われまいと果敢に飛びかかっては敗北し、あきらめてか穴の入り口に戻ってまたぼくの方を見て、ねえ、おむすびコロリンコロリン、をまたやってよ、そう催促するかの身振りに、ぼくはもう、ただただ感動。しっかりとかの君と仲良くなったのであります。

でも、さすがに、彼と握手したり、頭をなでたり、する勇氣は持てませんでしたけどね。だって、ネズミって、我が日本における人間との敵対的競争相手じゃないですか、そんな情報を遺伝子に刷り込みされているわたしとしては、今更、親和的競争相手として心情をもったとしても、そのままの行動に及ぶにはちと、交流の日時が短すぎますわな。

ああ、かの君も、いずれの日にや、我の見たる頭上高く舞いし鷺の餌食となるらん。これもまた自然の摂理なれ。

(2001年作)